

\*目次

copyrighted material

はじめに

<b>第1章 PTSD理論の根本的問題点</b>	<b>3</b>
PTSD理論と〈幸福否定〉	3
事実を明らかにすることの重み	12
PTSD理論の弱点	17
正当な自己主張の難しさ	24
当事者の責任という問題	27
<b>第2章 PTSD理論の内部構造</b>	<b>39</b>
PTSDの流行性と多様性	39
問題点の整理	41
伝統的な“虐待”と“先進国型”の虐待	42
被害が先か、症状が先か	44
出来事の直後から起こる症状と、時間を置いてから起こる症状	53
自然災害による被害と、人災および犯罪による被害	58
虐待者との間柄——身内か、見ず知らずの他人か	59
正常反応と異常反応	67
本章のまとめ	69
<b>第3章 PTSD理論の政治学</b>	<b>71</b>
科学と政治学	71
PTSD概念がDSMに導入されるまで	87
その後も続く疑念	99
リフトンのPTSD概念の不明瞭性	103
PTSD理論の政治学の亀裂	107
<b>第4章 PTSD理論の心理学 1——心身の反応が起こる原因</b>	<b>113</b>
ふつうの市民が戦場で残虐行為を引き起こす理由	113
ミルグラムの貢献	122
ミルグラムが浮き彫りにした、権威に対する強い服従心	125
権威に反逆することに対する強い抵抗——主体性の否定	134
権威を積極的に権威たらしめようとする意志	141

## 第5章 PTSD理論の心理学 2—加害行為と“PTSD” 145

- 個人の責任という問題—再考 145  
 責任や反省を極度に回避する重罪犯 150  
 反省を忌避する理由 152  
 前章からのまとめと整理 155  
 加害行為と“PTSD”の関係 165  
 ベトナム帰還兵の“PTSD” 178  
 まとめ 189

## 第6章 PTSD理論が忌避するもの 191

- 心理的原因と精神科医 191  
 心理的原因の推定と確認 195  
 社会生活指導から小坂療法へ 201  
 トラウマ理論から脱却した小坂理論 211  
 専門家たちの奇妙な反応 217  
 非専門家的抵抗の起源を探る 222  
 PTSD理論と人間の主体性 229

## 第7章 ストレスに対する対応—被爆者を中心として 231

- 被爆者の体験 234  
 本当のストレスに対する反応 246  
 強制収容所からの生還者たち 253  
 過酷なストレス状況の中で、高みに達する人たち 258  
 おわりに 266

## 付録 269

- 付録1 DSM-ⅢによるPTSDの定義 270  
 付録2 さまざまな反応の項目別整理 273

## 参考文献 289

## 索引 305

【註記】本文中のルビの[註n]は当該ページもしくは、次ページ下端の註nに、また、( )内の姓と年号は巻末の参考文献に、それぞれ対応しています。

# 加害者と被害者の“トラウマ”

## 図表目次

### 第1章

図1-1 代理ミュンヒハウゼン症候群の女性の事例 29

### 第2章

表2-1 加害者との間柄と性的虐待の記憶の有無 61

表2-2 虐待の内容と加害者の続柄 64

表2-3 年度別に見た最近の虐待者 65

### 第3章

表3-1 発症の場所と配備の形態 101

### 第4章

図4-1 ミルグラム実験での教師役と生徒役 129

表4-1 服従実験の条件と服従率 137

### 第5章

表5-1 拘禁反応の発生率 152

表5-2 国府台陸軍病院に中国大陸から入院した  
精神障害患者の発病地別実数の年度別推移 161

表5-3-1 加害者の“PTSD”に関する研究 1  
——統計的研究 170

表5-3-2 加害者の“PTSD”に関する研究 2  
——事例研究 171

図5-1 責任の認識度と症状の関係を示す模式図 177

### 第7章

表7-1 戦闘後症候群におけるフラッシュバックの  
発生率の歴史的推移 237

表7-2 広島・長崎両市における被爆者・非被爆者の  
労働力の有無 247

シエーマ 267